

津山藩と幕末政局

— 中央政治と「攘夷」への対応の一形態 —

笹部昌利

〔抄録〕

本稿は、薩長土以外の中小諸藩の個別分析が欠如するこれまで明治維新史研究に介在する問題点を明らかにするために、津山松平藩を析出し、同藩の幕末維新期の政治動向を明らかにしようとするものである。特に中央政局と地方（諸藩）の複雑な推移、対立、相互関係など多面的な政治過程のなから、個別藩における中央への対応形態がどのように精選されていくのか、諸藩の政治

運動が活発化する文久期（一八六一—一八六三）において、津山藩が諸藩の動向および攘夷問題に如何に対応していったのかを明らかにし、幕末期における藩の実像に迫る。

キーワード…津山藩、攘夷、諸藩の政治運動、親兵、八・一八政変

はじめに

戦後の明治維新史研究は西南雄藩討幕派史観あるいは薩長中心史観によって進められ、そこでは西南雄藩のなかで如何に討幕派が形成されたのが主要な問題点となり、薩長に加え土佐、肥前の雄藩がその対象に挙げられ、一面的な研究が蓄積されてきた。

しかし、明治維新は少数派の西南雄藩から発生した討幕派の政治運

動の延長線上に成立したのではなく、幕府、朝廷および全国中小諸藩勢力による複雑かつ重層的な政治過程から成立したものである。よって、幕末維新史の全貌を導き出すには薩長土以外の中小諸藩の個別分析が進展することが必然となる¹⁾。

本稿では、従前の明治維新史研究に介在する問題点を明らかにするために、津山松平藩を析出し、同藩の幕末維新期の政治動向を明らかにしようと思う。特に中央政局（京都 ※以下カッコ内は笹部）と地

方（諸藩）の複雑な推移、対立、相互関係など多面的な政治過程のなかから、個別藩における中央への対応形態がどのように精選されていくのかを明らかにしたい。

津山松平藩の幕末期における政治過程に関する研究蓄積は『津山市史』五巻、『岡山県史』九巻などの自治体史で触れられている程度であり、我々の世代の研究者（幕末政治史に関係なく）が分析対象として十分に考察する価値があると思われる。以下、幕末期、津山松平藩が中央政局へ、また「攘夷」という幕末期のキーワードに如何に対応したのか明らかにしていく。

I 幕末政局における津山藩の位置

1 津山松平の家格

まず、津山藩について少々述べておくことにする。美作津山に越前松平家が入封するのは元禄十一年（一六九八）である。それまで美作一国を支配した森氏は、四代森長成の死後、後継として衆利を養子に入れたが、病を患い江戸への参府、將軍への挨拶（御目見）が滞ったことを咎められ改易となり、これに代わって、元禄十一年正月十四日、越前松平長矩が美作国の内十萬石を領して、森氏の拠城であった津山城（鶴山城）に入り、以後明治維新に至るまで津山松平家による支配が展開される。津山松平家は、徳川家康の第二子結城秀康を始祖とする越前松平家の嫡流筋の家柄であり、「家門」に類別される³。長矩が十萬石で入封した後、嫡男浅五郎が次期藩主となるはずであった

が、元服を前に急逝したため、養子が立てられず、禁じられていた末期養子を立てたことを咎められ、五萬石に減封された。

越前松平家は津山（五萬石↓十萬石／大広間↓大廊下）の他、福井（三萬石／大広間↓大廊下）⁴、糸魚川（二萬石／帝鑑間）、松江（一萬六千石／大広間）、広瀬（松江支藩／三萬石／帝鑑間）、母里（松江支藩／一萬石／帝鑑間）、前橋（二七萬石／大広間）、明石（八萬石↓十萬石／大広間↓大廊下）⁵の八家からなり、本来的な家格序列でいえば津山が筆頭で越前本家に当たるのだが、石高において圧倒的に高い福井松平との間で天保期以降、越前松平家において本家分家をめぐる問題が生じた。

このような津山藩における家格に対するこだわりは、十一代將軍家斉の実子銀之助（十六男、後の八代藩主斉民）が養子として津山に入った文化十四年（一八二七）あたりから顕著となる。『津山市史』五巻には七代藩主斉孝に単に男子がなかったという理由で、単に御家存続のため銀之助が養子として迎え入れられたとされているが、將軍の実子を貰い受けるということは、「將軍の血」が津山松平家に入ることと同義であるから、この御家存続の要求にはもう少し裏があらう。藩によっては養子は勿論、それに付随してくるさまざまな恩恵をあてにするケースが往々にして存在する。津山藩のケースはこれに当てはめて然るべきである。

津山松平家は享保十一年（一七二六）以来九十一年間、五萬石と小禄であり、『岡山県史』等の記載でも既に明らかのように、藩財政は災害、飢饉等により危機に瀕していたことも事実であった。また將軍

家にとつても実子を養子に出すに当たり、地位的にも、経済的にも相応しい家を望むであろう。津山松平家は家格こそ越前家筆頭と十分であるが、五万石といかにも寂しい。

実際に文化十四年、將軍家斉の子銀之助が津山藩主松平斉孝の養子となり、同時期に十万石に加増復帰する。このような家斉の実子の他家への流入過程については、意外にあきらかにされておらず、詳細な分析を要しよう。なぜなら文化文政期における將軍家斉の子の他家への流入動向が、幕末政治の重層性を規定する一つの要因となつてゆくからである。

天保二年（一八三二）藩主の座についた斉民は、安政二年（一八五五）、前藩主斉孝の実子で、形式的に斉民の養子となつていた慶倫に家督を譲るまで二十四年間、藩財政および教育の面で多大な成果を上げた。また斉民は隠居後も「確堂」と名乗り、津山藩政に、或いは幕府との関係において大きな影響力を有した。

2 政治運動への志向

さて、津山藩の政治運動が活発となるのは、文久二年（一八六二）十一月下旬ごろからである。文久二年四月以降、薩摩、長州を初めとする外様藩勢力が京坂地域に滞在して、朝廷との関係を密にし、それに伴い京都において幕府権力が希薄化していく状況へのアンチテーゼとして津山藩の政治運動は企画された。津山藩江戸詰の年寄である黒田彦四郎は薩長外藩勢力が「京都ニ出テ攘夷ノ宣命ヲ下サレンコトヲ強請」し、ここまでは「幕府因循決セズシテ若シ外藩ニ宣命ヲ下サ

ル、コトアラバ征夷大將軍ノ職責ハ如何セン」と外藩先行の状況に憤りを感じ、文久二年十一月十七日、江戸を発ち、同三十日に国元に至り、すぐさま藩主慶倫が朝幕双方の間にたつて国事周旋に尽力すべきであると説いた。⁽⁶⁾

藩主の国事周旋を求める動きは国元においても存在した。文久二年十月に藩儒として任官された鞍懸寅二郎⁽⁷⁾、家老永見丹波の家臣矢吹正則、藩の剣術師範役の井汲唯一、小姓組の藤本十兵衛、藩が採用していた越州流兵学の師範榊原平次郎らであるが、『岡山県史』などの記述によると、彼らは概して「尊攘派」と呼称されている。これは「急進」なるものを、「尊攘」に結び付ける政治的派閥の対抗および闘争関係が重視され展開されてきた明治維新政治史にありがちな傾向であるが筆者はこれには反対である。

それでは彼らは如何なる主張を持つているのか。主張のベースは黒田同様であるが、文久二年十一月、榊原平次郎より藩主へ提出された建白書⁽⁸⁾の内容を見ていこう。

①文久二年十一月当時の政情を「勅諭を列藩の諸侯に下し賜り、多勢上京、天朝を守護し奉り、飽迄尊王攘夷の色を顕し候得共、内心には野心を挟候輩可有之歟、只幕府を庄倒し奉るの手段と相見へ申候」と、尊王攘夷を唱えて朝廷に近づく外藩勢力の真の意図は幕府を庄倒することであるとしている。

②津山松平家が「幕府之御親藩格別御由緒も被為在候御家筋」、「無此上御家筋殊に御高官」なので「天下諸侯の巨魁と御成被遊候て公武合体之御周旋被遊」ることが先決である。

③具体的な国事周旋の方法としては、薩長の行うような「多勢上京」つまり兵力にものを言わせた国事周旋の方法では「人心動揺」を生じさせると非難し、津山藩は精選の藩士五、六名を上京させ、「近衛殿二条殿其外御統柄の公家衆を以、公武御合体御周旋可申段、勅諭を申賜り、尊王の御誠心を御顕し可被成、其趣外藩えも御告被遊共々周旋可致之段御相談有之」れば、津山松平の家格は「外諸侯の類に無之、諸侯よりも尊敬被致、御鼻立」となるとする。

以上の三点が榊原建白の主旨であるが、急進的内容ないしは攘夷主義を感じさせる文言は見当たらない。その意図は藩主慶倫が上京して朝幕双方の周旋に当たることであり、また外様諸藩と朝廷との癒着傾向を断ち切るためにも津山藩が全力で国事周旋に取り組むべきとするものである。

文久二年十一月、京都における薩長外藩勢力を退け、朝廷への対応は幕府および親藩勢力により行われるべきとし、特に藩主慶倫の国事周旋を主張する彼らを単に尊攘派とは類別できないであろう。ここでは彼らを国事周旋推進派（以下、推進派と略）と呼称することにす

る。しかし、藩政府要人は推進派による藩主の上京、周旋要求を呑まなかった。津山藩政府は刻々と変わる中央政局の状況をうかがうべく、年寄格の海老原極人を京都留守居に、前述の鞍懸を「他藩応接掛」として京都に派遣していることで事足りるとし、推進派の要求を却下したのである。

また従来、藩主の慶倫もこの国事周旋要求を却下したとされるが、

慶倫自身は文久二年末段階の政情をどのように見ていたのか。「朝旨遵奉公武御和合之儀建白書」⁹と題された文久二年十二月に幕府へ提出された建白書の内容を見ていこう。

①津山松平家が「一旦御取潰ニモ相成」かけたが、將軍家の「御哀憐」により存続が許され、かつ「越前家ト称シ御三家ニモ准シ候」待遇を受け「内外諸大名ニ拙格外之忠勤可相励家筋」であるにもかかわらず、今もって「些少之忠勤モ無御座、徒ニ貪鴻恩」っている現状ではあるが、諸外国が「皇国之間隙ニ乗シ利欲ヲ逞セントノ姦計」を企て「私共拙精忠、皇国之武威ヲ示シ夷狄自ラ恐怖退散之御謀議ヲモ可奉輔助候」と諸外国との間に問題が起これば、すぐに馳せ参じて恩に報いるとの意思表示をする。

②現行の京都の政情については「薩長土之三藩勅命ヲ奉シ忠節相研キ確乎不可拔之光景」を「千歳一時難再逢之機会ニ御座候」と、攘夷決行にはまたとないチャンスと認識している。しかし諸外国が眼前に迫っている非常時に朝廷が勅命により「攘夷ヲ外諸侯ニ」命じたり、「御親征」が主張されたりしていると、「夷狄の胸算」に陥り兼ねないとする。よって、ここは幕府が朝廷側の言い分を呑み、將軍が「征夷之御職分」を尽くし「外患内憂一ツハ御免レ無之儀ニ候ハ、寧内憂御釀無御座方可然」と、国内の政情の安定を図るのが先決であるとしている。

③武備充実を待ち、その後攘夷を行うとの幕府の姿勢は尤もであるが、重要なのは武備充実の方法であるとする。つまり「武備之調ト申ハ兵器器械ノミニ無御座候、唯一心之決定ニ御座候」と、人民の心を

攘夷一点に向けさせることが大事であるとし、その「一心之決定」は「武備之大成者」たる「將軍」が「征夷之号令」により日本を「挙国一心奮発」の状況へと導かねばならないとするのである。

ここで慶倫は、外藩の政治運動により混沌と化した国内の政治状況を幕府主導により取りまとめ、その後、諸外国に対する構えとして、將軍および幕府が主導する挙国一致体制を構築することが必要であるとする。つまり国内外に向けての政治の実権が、天皇や公家ましてや薩長外藩勢力によって握られてはならないのである。

ところで、藩主慶倫への国事周旋要求を却下された黒田は文久二年十二月十二日、失意のうちに津山を發った。しかし、黒田の建白に感銘を受けた周旋推進派、井汲唯一、矢吹正則、藤本十兵衛、榊原平次郎の四名は、伏見において黒田へのコンタクトに成功し、かつ京都から推進派の海老原、鞍懸の二名も駆けつけた。彼らはこの際、黒田が津山藩の代表として上京し、慶倫に国事周旋の勅命が下るよう公卿の間を奔走せよと求めた。ここにおいて黒田は彼自身による周旋を決意した。この際の黒田の周旋対象については明らかにされておらず、唯一「明治維新前美作志士列伝」の黒田の説明文中「中川宮、彦四郎が着衣藩主ノ紋章ヲ付セルヲ台覧アリテ、汝ノ主家ハ東照宮ノ嫡流ニシテ且ツ前中将ハ幕府ヨリ入レリ今日ノ場合、公武ノ間ニ尽力スルハ真ニ当ヲ得タリトノ上意ヲ蒙レリ」とあり、『津山市史』には中川宮だけが黒田の周旋対象として上げられている。

文久期以降、諸藩勢力の上京周旋が活発化するなかで、大名と縁戚関係にある特定の公卿が窓口となるケースがある。例えば、島津家と

近衛家、山内家と三条家、鳥取池田家と二条家がよく知られているが、『津山藩松平家御親類御両敬之方々覚書』¹¹によると、津山松平家と縁戚にある公家には有栖川宮（熾仁）家、三条（実美）家、九条（尚忠、道孝）家、櫛笥（隆韶）家、園池（公静）家があるが、文久三年正月以降の段階で津山藩へ勅諭降下を依頼できうる家は三条家であろう。従前ならば朝議には参画できなかったが、文久二年末から三条実美ら急進派少壮公家は朝廷内の新設機関「国事御用掛」に任命されるなど、その勢いはめざましいものであった。¹²

実際、この後、文久三年二月の慶倫初入京の際、まずあいさつに赴いたのは三条家であった。黒田の熱心な周旋により津山藩は以下の内勅を得ることになる。ただあくまでも内勅は真の勅諭ではない。

松平三河守赤心之趣達叡聞候間、登京有之候ハ、暫滞在、为国家尽力有之候様被遊度、被仰出候事

本来なら内勅が下った後に勅諭が下るのが普通であるが、津山藩主宛ての勅諭は管見の限り見当たらない。この内勅は黒田が文久三年正月八日、武家伝奏坊城俊克郎において受け取り、井汲ら推進派四名の護衛のもと同月十三日、津山に到着した。¹³「上京、滞在して国家のために尽力せよ」との漠然な命令内容であるが、この内勅により重腰であった藩主慶倫は上京し国事周旋に当たることを決意した。

『津山市史』五巻では、この折、津山藩では藩論（藩是）を「尊王攘夷」に統一されたとある。しかし「津山藩国元日記」中には、藩是を「尊王攘夷」に一決したとの内容は見当たらないし、これ以後の慶倫の動向をみても藩是が決定されたとは考えられない。また『岡山県

史』九巻でも津山藩論が尊王攘夷に一決されたことを述べ、長州藩のそれと比較して穏健、「翼霸」的性格があると述べている。「明治維新前美作志士列伝」中には「藩論遂ニ勤王ニ一決セリ」とあるが、この際に決定された藩政府の方針は、藩主慶倫が上京し、「王事」に「勤める」こと、つまり国事周旋運動に参加することが決定されたとしたほうがよいであろう。

Ⅱ 攘夷をめぐる政治運動

1 藩主慶倫の国事周旋と攘夷への対応

かくして藩主慶倫は文久三年（一八六三）二月五日、上京の途につき、同十四日入京し、堀川寺ノ内の妙蓮寺に入った。¹⁵ また慶倫は後述する文久三年八月の上京の際（紫野の雲林院に滞在）にも、相国寺の北東、寺町通達橋上ルの津山藩邸には滞在しない。

文久二年末以降、諸藩は京都藩邸用地の獲得に動くが、文久三年段階では、薩摩島津などが広大かつ複数の藩邸を有する他、大抵の藩の京都における滞在施設は整っており、藩主の滞京の折には縁故の寺院を宿舎とするケースが多く見られる（例えば、鳥取藩と北野梅松院、熊本藩と南禅寺など）。¹⁶ 津山藩邸については、文久三年初旬段階から史料によりその存在が確認できるが、非常に手狭であり、藩主の長期滞在に耐え得る機能を持たないものであったと考えられる。

二月十八日、慶倫は初参内した。その際、小御所において孝明天皇より「速やかに掃攘之功を建てよ」と勅命が下り、これまで藤堂藩が

担当してきた伊勢神宮警衛を今後、どの藩が、如何に担当するのか、また諸外国が目をつけていた隠岐・対馬のような離島の警衛について議論された。¹⁷

この時期、朝廷内では三条系急進派公家グループが孝明天皇をはじめ、近衛忠熙、中川宮ら朝廷上層部を席巻しようとする勢いであった。「諸藩不拘大身小身朝廷ニ被召寄、衆議可被聞食、草莽間之有志之輩之議論ハ於学習院国事御用掛之人聞届可言上」¹⁸ すべきと考えていた三条ら急進派は、二月二十九日、諸藩の国事周旋掛に学習院への出頭を命じ、「浮浪有志之輩」を攘夷の先鋒隊として組織するか否かにつき諮問を行う。¹⁹ 津山藩からは「他藩応接掛」鞍懸寅二郎が赴き、次のような建言を行う。

①「浮浪盡志之者」攘夷先鋒を命じられると諸藩の「正義を押立忠勇相励居候士大夫」の面目が立たないので見合わせたほうがよい。

②浪士を統括する機関として「総都督」を幕府の役人へ命じられても、「征夷大將軍は朝廷之御重職にして徳川家一府之官爵に無御座、征夷大將軍之御官爵未だ徳川家より御剝取無之中は、攘夷之事徳川家へ被仰付候儀と奉存候」と攘夷はあくまで將軍の職掌であるので徳川家に委ねるべき。

「他藩応接掛」の鞍懸が、朝廷・諸藩に対し積極的な活動を行う一方で、慶倫は上京後、二月十八日の初参内以来、これといった政治活動を行ってはいない。然るべき政治方針もなしに上京し、国事周旋を行うといっても、どうすればよいのか見当がつかないというのが慶倫自身の本音であろう。このことは慶倫に限られたことではなく、前年

より予定されていた將軍上洛に供奉するべく上京した大半の大名は、慶倫同様に、京都政局における自分自身の位置に戸惑っていた。逆に同時期、將軍上洛に備えて政治諸策を練るべく、それぞれの政治的ビジョンのもと會議に参加していたのは、將軍の先発として入京していた將軍後見職の一橋慶喜、政事総裁職の松平春嶽、京都守護職の松平容保の他、鳥取藩主池田慶徳、土佐前藩主山内容堂、宇和島前藩主伊達宗城ら数名にすぎなかった。

慶倫は二月二十九日、京都所司代牧野備前守忠恭に対し、「領分讃岐国小豆島之防御」を實行するため「此儘当地（京都）ニ滞在候テハ指揮行届」かないので帰国を願ひ出ている。⁽²¹⁾この慶倫の帰国願ひには二月十八日の天皇の攘夷勅諭および二月十一日、三条ら急進派公卿の執拗な攘夷期限決定要求に対して、將軍の先発として在京していた「將軍後見職」の一橋慶喜が折れ、攘夷期限が「四月中旬」にとりあえず決定されたことが影響していると考えられるが、一方で京都における自らの政治へのスタンスが曖昧であるため、「攘夷」「海防」に力を注ぐとする慶倫の意図が読み取れる。

三月四日、將軍家茂は上洛し、二条城に入った。同日、在京大名に對し將軍への「御目見」のため明五日、登城が命じられるが、慶倫は「足痛」のため登城を断っている。⁽²²⁾

三月七日、慶倫は將軍参内に供奉随⁽²³⁾行し、三月十一日賀茂社行幸の際にも慶倫は供奉随⁽²³⁾行、津山藩兵は賀茂社まで道路筋の警備を命ぜられ、家老一名、番頭一名、物頭二名、平士二十五名、鉄砲足軽三十名の計五十九名により、御所清和院門および下賀茂社頭（阿波藩、仙台

藩と共同）の警備に当たる。⁽²⁵⁾慶倫在京時の主な政治への参加は以上の將軍参内の折および賀茂社行幸に供奉した程度であった。行幸後、慶倫は老中へ帰国願ひを頻繁に提出するが、在京の老中水野忠精は「大樹御発駕迄滞京有之様」と返答した。⁽²⁶⁾將軍上洛の前段階において將軍の滞京期間は十日と決まっていたのであるが、朝廷側が執拗に將軍の長期滞在を要求したため、將軍滞京日数は延長され、慶倫の滞京も自ずから延長されることになっていた。

結局、慶倫の帰国が許可されるのは、五月四日、老中板倉勝靜より「其方儀在所え之御暇被下候様相頼候処、御統柄之儀ニも有之候間、還御迄は在京候様相達候、いまた還御之御頃合も不相分事故、此節在所え罷越不苦候」と、將軍退京の目処がいつになっても立たないの⁽²⁷⁾で、慶倫は帰国を認められた。これを受けて五月七日、慶倫は早速、京都を発つ。この帰国許可には次に見ていく摂海（大坂湾）警衛が具体化されてきたことも起因すると考えられる。

さて、一橋慶喜らにより攘夷期限が「四月中旬」に決定されたことは前にも述べた。幕府は三条ら急進派公家に甚だ無理な約束をさせられたわけだが、約束した以上はそれなりのお膳立てをせねばなるまい。そこで幕府は諸藩に對し「摂海警衛」を命じる。津山藩に對しては以下の命が下る。

摂海湊川辺ヨリ武庫川迄御固被仰付候間、守衛向嚴重可被相心得候。尤場所之儀は、於彼地割渡可申候。亀井隠岐守、中川修理大夫えも同様被仰付候間、申合可相勤候。且又摂州播州境川より湊川辺迄之御固酒井若狹守え被仰付候間、為心得相達候⁽²⁸⁾

これは三月晦日付で老中水野忠精から京都留守居吉田権平に渡された御用状である。この時点では湊川から武庫川間の海岸周辺を津山藩、津和野藩、岡藩の三藩で担当することが命じられたが、まだ明確な警衛場の割り当てはなされていない。

しかしそれは、最初に慶喜によりとりあえず決定された攘夷期限「四月中旬」が履行されず、四月十八日、將軍家茂が在京諸大名に外交方略を諮問し、それに応じて攘夷期限が五月十日に再確認されたことにより、摂海警備のさらなる具体化が急がれる。

御名（慶倫）儀、今度摂州横川ヨリ味泥川迄御警衛被仰付候付、御固場左之通人数差出申候

士大将 老騎 番頭 老騎 大砲奉行 老騎 使番 老騎
鉄砲頭 老騎 旗奉行 老騎 陣場奉行兼小荷駄奉行 老騎
メ七騎

右之外戦士大砲打方共都合式百五十人計差出申候（中略）大砲拾五挺程（以下略）⁽²⁹⁾

右は五月十六日、老中板倉勝静から京都留守居介の村瀬純之進への達書である。これにより津山藩は改めて摂州横川から味泥川までの海岸の警衛を命じられた。

摂州横川より味泥川迄之間、御警衛被仰付候付、是迄松平大膳大夫様仮陣屋相成居候五毛村神宮寺并右近辺仮建物等讓受候示談相整、昨十五日夫々受取申候、依て出張人数并武器共右之内え差置可申候（以下略）⁽³⁰⁾

さらに、右の大坂城代松平伊豆守信古より津山藩大坂屋敷留守居中

澤廣江への達書によると、津山藩は同年三月まで摂海警衛に当たっていた長州藩が仮陣屋にしていた摂州五毛村の神宮寺及び付近の建物の使用を許され、そこを拠点とし摂海警衛に当たることになった。

次に文久二年末段階より、朝廷から幕府に対し要求され、文久三年三月設置されることになった親兵制度⁽³¹⁾と、親兵への津山藩の対応について見ていく。

そもそも、この朝廷から出された親兵制度要求は三条系急進派公家グループが主に提唱したものである。当時、朝廷内では「国事参政」「国事寄人」とよばれる新設の役職にこれまで朝議に参画できなかった三条実美の息のかかった中下層の公家が就任していた。彼らは前年十一月の三条実美攘夷勅使派遣の際に要求され、一度は幕府に却下された親兵設置に関する要求を、將軍上洛に際し再び浮上させたのである。彼らは「親兵は諸藩より高割にて人数を出さしめ」、「専ら鳳閣の守衛に任じ」るよう要求していた。幕府および長州、会津などの藩の中にも御親兵設置に関しては賛否両論が存在したが、結局、三条系尊攘公家グループの意向に押し切られ、その設置が決定し、三月十八日には幕府から、同二一日には朝廷から諸藩に対し「禁闕御守衛諸藩拾万石以上、高割ヲ以一万石一人宛貢献致候」と命じられた。⁽³²⁾

親兵は「守衛兵」にその名称を変更し、文久三年四月、三条実美が「京都御守衛御用掛」に任命され、文久三年八・一八政変に至るまで御守衛兵を差配していくことになった。

表高十万石の津山藩も、三条の主導する親兵制度に参加する。

去月（七月）廿一日三条様江御留守居村瀬善右衛門左之書付持参

差出候

御守衛人数 隊長 海老原極人、侍三人、鎗持老人、草り取同、

伍長 栗田辰右衛門、侍老人、鎗持同

北郷 恰、侍持老人以下同段

江口衛助、細江津守、三橋弥十郎、広瀬瑞水、尾上

鐘左衛門、阿部多龜之丞、宇津木政之進、³³十人

大砲老挺、小銃三挺、馬二匹、右之通御差出候以上（以下略）³³

右のように、津山藩の親兵は京都留守居の海老原極人を筆頭に石高十万石の津山藩は十人という規定通りの選出数であった。諸藩から選出された親兵は三条実美差配のもと、文久三年六月―七月にかけて急速な組織化が図られる。守衛方法は禁裏建春門を起点として、津山、熊本、宇和島、津など七藩が三日に一回（熊本は三日に二回）、昼夜交替制で御所および禁裏周辺の警備にあたることになった。また選出親兵の屯所は相国寺他その周辺の寺院が貸し付けられ、津山藩親兵には本満寺一条院、守玄院の二寺が提供された。³⁴

文久三年、藩主慶倫帰国後の津山藩と朝廷の關係は、新たに導入された親兵制度を媒介として、藩の京都留守居および選出親兵と三条系急進派公家によって成立していた。

津山藩の場合、京都藩邸に滞留する留守居衆と、本満寺に駐屯する親兵は一人の藩士が兼任しているというケースが多い。³⁵例えば、京都留守居の海老原極人は津山藩親兵隊長を兼任している。また津山藩と朝廷の關係は親兵制度という具体的な組織によってだけでなく、彼らが政治運動を展開する際（その最終目的の差異は別として）表立っ

て標榜された「攘夷」という精神的な指標によって連結されていた。

文久三年三月の將軍上洛、参内と時を同じくして、朝廷は五四名の諸侯に対して国事に關する意見を求めている。その際、津山藩主の松平慶倫は「不拘策略之有無、攘夷上策」と攘夷に強硬な姿勢でのぞもうとしている。他に米沢藩主上杉斉憲や津藩主藤堂高猷などは、諸外国との交易が国内を疲弊させ、人心を動揺させる要因であるとして諸外国と通商を「総テ断之事」とし、その内容に緩急差はあるが、国内における諸外国の存在を否定する面では一致する。³⁶

文久三年における藩の政治運動は、藩主の国事意見に見える「攘夷」をめぐり、中央政局と化した京都或いは朝廷への対応という形で展開されたのである。

2 政変以後の政情と津山藩

本節で主に使用する「文久三癸亥年御上京中八月九月御日記」は、文久三年八月十六日、藩主慶倫が幕府に攘夷を促すべく江戸へ向かう途中、二十七日に京都に立ち寄り、そのまま滞在した期間、八月二十七日から九月二十八日に認められた日記である。以降、この「御上京中日記」により八・一八政変直後の政情とそこにおける津山藩の位置について見ていくことにする。

まず、「御上京日記」には八・一八政変を体験した津山藩親兵の動向についての記述がある。³⁷

八月十八日、一、朝五時前、栗田辰右衛門義、海老原諸宿え罷越、今朝未明より会津殿人数数百人二條之下之方え罷越、其後承

り候得は、御所九門老人も通行不相成趣承り候旨申出、左候得は早々一同召連、三条様迄兎も角も罷出可申旨、相達直ニ支度相調、無程極人（海老原極人隊長）義は騎馬尤も差急候付、一騎ニて三条様え駈付、御取次を以何等之義ニ御座候哉（略）御所九門通行御指止ニ相成候趣ニ付、無據御当殿え不取敢參上仕候。追々人数も罷出候付、御用も有之候ハ、被仰付度旨御取次え申達候。

右の史料によると、政変が起こつたことに気がつかない津山藩親兵は、事情を問い合わせるべく三条邸に駆けつける。八月十日ごろから在京の薩摩、会津藩勢力の地下活動によって、朝廷上層部、なかでも近衛、中川宮、二条斉敬など限られた公卿を交えて秘密裏に進められてきたクーデター計画であつたから、三条が事のいきさつ、真相を知るよしもなかつた。

この後、三条は諸藩の親兵を引き連れ参内しようと試みたが、御所の内の状況は「鉢巻を締、何連もケウエル（ゲベール銃）を携、今も砲放之勢ひ」であつた。三条らはそれまで癒着関係にあつた鷹司閔白邸に赴かんとしたが「鷹司様表御門を開、壹町斗も参り候処、会津侯、薩州侯御人数勅命之趣ニて相通し不申、無余義人数一同引返」す他なかつたが、引き返そうとしても「稲葉殿御人数大小銃ニて相囲罷在、すさまじき事」にて、三条の率いる親兵一同は思案したあげく、とりあえず「大佛殿」つまり方広寺境内に赴くことを決め、武器兵糧を携えて方広寺へ屯集させた。その後、三条は三十三間堂に諸藩の隊長を招集し、「御親兵之義」につき「是迄召連候得共、只今は迄之通九御門徘徊被免候間、早々罷帰伝奏之差図を受、禁闕之御守衛」せよ

との命を下す。これはつまり三条の「京都御守衛御用掛」の辞意表明であり、三条の「私兵」と化していた親兵組織の解散（事実上の解体は朝廷より京都守護職に宛てて諸藩へ親兵帰国の命が出た文久三年九月七日）を意味した。

佐々木克は、徳島、岡山、鳥取、米沢、熊本、金沢、水戸、土佐、久留米、津、芸州、大垣、姫路、彦根、松山、高松、中津、宇和島の十八藩の親兵が三条実美に随従したことが確認できるとするが、これまで参加が確認されなかつた津山藩親兵も事実、三条の護衛として従っている。これまで八・一八政変の具体的な事実につき、その典拠が『七年史』『改訂肥後藩国事史料』『防長回天史』などに依拠されてきたが、今回の津山藩のケースも往々にして考えられるので、諸藩政史料によって事実確認する必要性が生じてきた。

さて、三条の親兵が解散したからといって、京都警衛の必要性がなくなつたかといえは、それは否である。朝廷はそれ自体に軍事力を持たないのだから、従前のような諸藩による警備要員が必要なのである。政変後の京都守衛はさしあたり政変前から在京していた諸藩と政変後に入京した津山藩などによって担われることになった。

政変後の京都政局において問題となつていたのは、政変により京都を追放された尊攘急進派の残存勢力の動向であつた。

摂海岸之内夫々御警衛向被仰出有之候処、此節和州路を放火乱妨および候浪士鉢之もの、河州路え企候外ニも相聞、岡部筑前守松平遠江守等え右召捕方被相達候儀ニ而、右様之折柄党類之もの共万一乱妨之儀難計候間、鎮防方兼而相心得臨機之取計者勿論、各

持場街道筋相見廻怪敷者召捕手に余り候て打捨二可被致候。右之趣可相達旨松平伊豆守差図付此段申候。⁽³⁹⁾

右によれば、政変によって一掃された尊攘急進派の残党が河内、和泉国において「放火乱妨」に及んでいるという情報があり、「怪敷者」がいれば召し捕り、打ち捨てる様に命じた幕府からの触れである。朝廷は、尊攘急進派が逆上し、再度、京都において暴挙に及ぶことを恐れた。よってそれを防ぐべく御守衛の継続が必要になったのである。

当時、在京していた諸侯の中でその中心となっていたのは中川宮、右大臣二条斉敬ら朝廷上層公卿と関係を密にし、朝議への参加をも許されていた鳥取藩主池田慶徳、岡山藩主池田茂政、米沢藩主上杉斉憲、阿波藩世子蜂須賀茂韶の四名の諸侯である。政変後は慶徳ら四諸侯に加え、政変後に上京した尾張前藩主徳川慶勝、芸州藩主世子浅野長勲が加わり、彼らを中心に諸侯「組合」が結成され、政変後の治安維持が図られることになった。

諸侯「組合」は京都市中警備のみならず、禁裏への参内の当番としても利用されており、成立当初は浅野茂勲グループ（吉番）、蜂須賀茂韶グループ（式番）、池田慶徳グループ（三番）、池田茂政グループ（四番）により組織され、以後、上京してくる諸侯に呼びかけ、取り込んでゆく形になり、「組合」数は増加してゆく。⁽⁴⁰⁾ 津山藩の場合、蜂須賀グループ（式番）に属し、四日に一回（三日隔）で、担当場である「今出川寺町西江八條殿町角之御固場」を警護した。また当番日には「上京日記」九月六日条によると「御留守居吉人、組頭吉人、御番方五人、馬吉疋」、九月九日条には「組頭吉人、御番頭六人、御役人、

足輕組頭若党三人、中間小使檢持兼四人、ゲール銃（ゲベール銃）五挺」で、固場の付近の有栖川宮邸内の一角を詰所として借り受け、警衛に当たった。⁽⁴¹⁾

また八月二七日の入京以降、慶倫の朝議への参加を示す史料は管見の限り見当たらず、参内して「天機窺い」を行う程度に止まっている。政変後の朝議においても、京都守護職松平容保や池田慶徳ら限られた諸侯の参加を認め、運営されていた。

この時期、朝議では政変後の国是が議せられたが、政変後も天皇の意志は「攘夷」と一貫していたので、政変後の朝廷の出方をうかがっていた幕府の尻を叩くべく有栖川宮熾仁親王を「攘夷別勅使」として派遣することに決定した。つまり政変後も、それまで同様、朝幕間では「攘夷」問題の折衝が続くことになったのである。

それでは朝議に不参加であった慶倫は、政変後の京都政局を如何に見ていたのだろうか。これは「上京日記」の九月二三日条に掲載された文久三年九月十九日付の慶倫の朝廷に宛てた建白書である。これまで未紹介であるので、あえて全文を引用することにする。

今度従関東天機為伺、酒井雅楽頭致上京候事、去ル十一日関東存慮以使者相尋候処、去月十二日諸大名総登城万夷拒絶申達シ、弥攘夷評決二相成候段、雅楽頭申答候。同十五日雅楽頭復又招家来昨日参内奉伺天機候処、段々厚蒙思召候間、明日発途可致候。今般必攘夷鎖港可奉安宸襟候間、左様被相心得安心可被致旨被申聞候。右之次第第二御座候上は、愚昧之私最早馳下二不及儀二奉存候。私東下仕度儀は唯々尊攘之大意を述候迄二御座候。既二此上

者策略ニ涉候事ニ候。策略之儀者私愚昧承知不仕処ニ御座候。依之一己赤心為可奉表、至て少人数召具上京仕候儀ニ御座候。先月異変後御警衛御嚴重承之候間、不取敢撰海御固場之人数を繰上ニ仕段途中召具一時之間ニ合候事ニ御座候。陣場至て手薄ニ相成候間、異船渡来之節者如何と甚心配仕罷在候。就而京師追日御靜謐ニ付御警衛向順序御緩メ被仰出候折柄ニ候間、私儀既ニ東下之御用無御座候上は、一先撰海御陣場江引取備向等指揮仕候事今日之急務と奉存候。猶閑東えは家来一兩人差下周旋為仕可申候。時宜ニ寄私儀早速東下違勅無之趣可申入奉存候。今日之御為筋如此外無御座候様奉存候間、兼而奉伺候進退之儀末々何之御沙汰無御座候得共近日中退京可仕候。右之段奉願候。誠々恐々頓々首々。

九月十九日 御名（慶倫）

右をまとめると、慶倫は江戸参府の途中、政変後、政情が切迫している京都に立ち寄り、滞京することになった。これに鑑み、大坂湾警衛を担当していた藩兵を一時的に呼び寄せ京都警衛に当てていたが、京都の状況は静謐で、多勢で警備に当たるほどでもない。摂州五毛村の陣屋も手薄になっており、諸外国の動向も気に掛かるので、ここで京都警衛を切り上げて摂海警衛に向かわせたい。また閑東へは慶倫の代理として使者（津山藩家老安藤要人、鞍懸寅二郎）を派遣し周旋に当たらせ、万一の場合は慶倫自ら江戸に下り、攘夷周旋に尽力するつもりであるが、取り敢えず、近日中に帰国を願っているとしている。

慶倫が九月十九日段階で帰国を示唆していることには、九月四日、幕府が横浜において、アメリカ、オランダの両公使との間で「鎖港談

判」を開始したことが起因する。この開始が決定すると、九月二日段階で決定した有栖川宮熾仁親王の攘夷別勅使派遣は延期される（事実上、中止）。つまり朝廷及び在京の諸侯には、幕府が取り敢えず鎖港を目指し諸外国との談判を始めたのだから、その成り行きを見守るしか手は無いのである。これにより、朝廷側の要求する攘夷を幕府に通告し、促すことを自らの義務として政治運動を展開していた池田慶徳ら在京諸侯の政治運動の必要性がなくなった。慶倫が早々に退京しようと考えた理由もそこにある。この後十月十日前後にかけて、池田慶徳ら朝議参加諸侯が帰国してゆく。その理由としてこれまで京都警衛の期限切れとか、十月三日に入京する島津久光らへの嫌悪感にあるとされてきたが、そうではなく、自らの政治運動、攘夷周旋の当面の必要性がなくなり、京都政局における自らの存在理由が曖昧になったためと考えられるのである。

政変以後、入京し、混沌とした政情に吞まれるように政局に参加した感がある津山藩主松平慶倫は結局、一ヶ月で退京してしまった。慶倫や慶徳ら諸侯による政変の事後処理という課題は、特に何の成果を上げられないまま、次に入京を果たす島津久光、松平春嶽、伊達宗城ら、参予会議の成立に向けて走り出す諸侯グループに委ねられることになってゆく。

むすびにかえて

文久期、津山藩の政治運動への志向は、中央政局と化した京都にお

ける薩長外藩勢力の政治運動により、將軍権力により展開されてきた政治体系、ひいては徳川家門としての津山松平家の他家に対するブライドが崩壊に瀕するという国内的危機を感じた藩士層の建言により發生された。津山藩の政治運動、藩主松平慶倫が上京し、朝幕間で生じていた攘夷問題を解決する国事周旋に集約された。

しかし、藩主慶倫の思惑は、藩士層に見られる津山藩の政治運動の独自の展開志向とは異なり、あくまで幕府が主体となつて攘夷問題を解決していくべきとし、藩自体の政治運動を重要視しないものであつた。よつて『津山市史』および『岡山県史』などの先行研究において述べられる、慶倫の上京周旋にあたり、藩是が「尊王攘夷」に一決されたなどという見解は否定されて然るべきである。

このような先行研究における誤つた理解は、長州藩の政治運動が藩是決定後の中央政局への展開という形をとつており、これに長州一藩の政治動向を藩勢力全体の動向と位置付けてしまい、同藩の論理に拘りすぎるきらいがあつた、これまでの明治維新史研究の欠点である。

藩是の一決後の国事周旋ならば藩主と藩士層に政治運動に対する見解の相違は本来なら表出すべきではないし、ましてや慶倫自身に（慶倫だけに限られたことではないが）政治運動に対する明確なビジョンが全くといつていいほど無かつたのである。それは文久三年二月慶倫上京後も、京都における自らのスタンスを見いだせず、すぐに帰国を願ひでている事実からもうかがいえる。さらに幕府および朝廷から、摂海警備、禁裏守衛のための親兵差出を求められると柔順に従うといふ、他藩において疑問視されていた、朝幕双方から下る二つの政令つ

まりは政令二途の状況への疑念も表出することもなかつた。

以上、見てきたように文久期における津山藩の政治運動は「地味」の一言に尽きる。しかし、何かにつけてそのダイナミックな側面が強調される幕末期の政治史において、大胆かつ際立つた政治運動を展開した藩は明らかに薩長土の外藩勢力、これに付け加えるなら鳥取藩など朝議と密接な関係にあつた藩のみであり、いふなればこれらの藩は特殊、かつ少数派である。よつて津山藩の他、全国の数多くの諸藩について検討していくことが無い限り、明治維新への政治過程はいつまでも薩長偏重型であり続けるのであらう。薩長両藩が維新変革の主体となつたことは否定できない事実であるが、変革には客体つまり「変えられる側」と、「変わつてゆく」或いは「変わる」勢力が存在する。以後、明治維新研究において考えられるべきは、維新変革において客体となつた勢力についてであらう。

さて、津山藩のほか、中央政治との関わりのなかで次に諸藩の動向が活発化するのは、元治元年（一八六四）から慶応二年（一八六五）にかけて二度にわたる幕長戦争時である。津山藩は実際、幕府の命令に従い長州へ向け兵を発するが、藩内の意見対立が生じ、明確な動きが取れなかつたというのが実情であつた。また鳥取、岡山他の諸藩においても同時期、反幕府的な主張および政治運動が展開される。その兆候は文久三年九月二五日、津山、鳥取、阿波、津、岡山、芸州の藩主連名により朝廷に宛て、結果的に中央政局から弾き出される形になつた長州藩への処分問題（三条ら七人の公卿を長州に連行した罪）の寛大化を主張し、長州を含めた列藩一致により攘夷へのさらなる邁

進を要求する「六藩建白書」に見えるのである。幕長戦争期の諸藩の政治運動の論証を次なる課題として筆を置く。

註

- (1) 明治維新史研究における中小諸藩の個別分析は、藤野保の「日和見諸藩等々の、個別分析による研究視野の拡大と問題の深化を通じて、それらをすべて包括する幕末・維新期のダイナミックな総合的研究を推進することにある」(『幕末維新期における小藩の構造とその動向』『史林』四六巻五号、一九六三、後に同著『日本封建体制と幕藩体制』塙書房、一九八三所収)との提言が出されて以降、九州諸藩の研究が小野正雄『幕藩権力解体過程の研究』(校倉書房、一九九三)、梶原良則『文久期における福岡藩の政治動向』(九州大学人文論叢「二五」三、一九九三)など研究が蓄積がされつつあるが、それ以外の地域の研究は立ち遅れており、各自治体史に負うところが大きく、未だ藤野の言う「総合的研究」には到達してはいない。
- (2) 津山藩についての概略は『津山市史』第五巻幕末編(一九八五)および『岡山県史』第九巻近世Ⅳ(一九八九)を参考とした。本文中に両書への異論点を掲げたが紙面の都合上、断らない限り注記は省略する。
- (3) 大名の家格に関しては松尾美恵子「大名の殿席と家格」(『徳川林政史研究所紀要』昭和五五年度、笠谷和比古「武士の身分と格式」(『日本の近世Ⅶ身分と格式』中央公論社、一九九二)などを参照。
- (4) 津山藩の家格および江戸城殿席の移動については「徳川諸家系譜」二(統群書類従完成会、一九七四)一七二―三頁。
- (5) 明石藩については前掲(4)一八一―二頁および『明石市史』上、三八六頁(一九六〇)。
- (6) 矢吹正己編「明治維新前美作志士列伝」(津山温知会編『津山温知会誌』十三、津山郷土博物館蔵)七〇―二頁。
- (7) 鞍懸寅二郎については『勤王之士贈従四位鞍懸吉寅先生略伝』(鞍懸吉寅先生建碑会、一九四二、津山郷土博物館蔵)および『津山市史』五を参照。
- (8) 「軍官榊原氏建白」(津山温知会編『津山温知会誌』三、津山郷土博物館蔵、榊原平次郎については前掲(6)七六―七頁および『津山市史』五、第三章人間群像に詳しい)。
- (9) 「朝旨遵奉公武御和合之儀幕府へ建白書」(『津山藩国元日記』文久三年正月十三日条、津山郷土博物館蔵)。
- (10) 前掲(6)に同じ。
- (11) 「津山藩松平家御親類御両敬之方々覚書」(『津山温知会誌』七所収)。
- (12) 原口清「文久二、三年の朝廷改革」(『名城商学』四一別巻、一九九二所収)。
- (13) 「津山藩庁日記」文久三年正月十一日―同十八日条(『大日本維新史料稿本』所収、東京大学史料編纂所蔵)。
- (14) 前掲(6)七七頁。
- (15) 「御上京中日記」文久三年二月十四日条(津山郷土博物館蔵)なお、同日記が京都留守居海老原極人の記録。
- (16) 諸藩の京都藩邸については『京都の歴史』7維新の激動(京都市編、学芸書林、一九七四)別添付図参照、鎌田道隆「幕末維新の政治都市化」(『京都市歴史資料館紀要』十号、一九九二所収)など。幕末期の京都の藩邸の機能については不明な点が数多く見られる。稿を分けて検討したい。
- (17) 「御上京中日記」文久三年二月十八日条、『孝明天皇紀』四(平安神宮、一九六八)三八五―九〇頁。
- (18) 「久邇宮国事文書写」(『孝明天皇紀』四、三八五―六頁)。
- (19) 「孝明天皇紀」四、四二五―六頁。
- (20) 同右、四三四―八頁。
- (21) 「御上京中日記」文久三年二月二十九日条「京都留守居村瀬善右衛門より京都所司代牧野備前守宛て書翰」、なお津山藩は天保九年から小豆島

西部の六ヶ村を領有しており、安政元年五月から小豆島警備を開始する。なお津山藩の海防政策として、小豆島警備の実体については稿を分けて検討することにする。

- (22) 洪沢栄一『徳川慶喜公伝』二(平凡社東洋文庫95、一九六七)一四八頁。

- (23) 『御上京中日記』文久三年三月五日条。

- (24) 同右、文久三年三月七日条。

- (25) 同右、文久三年三月十一、十二日条。

- (26) 『文久見聞録』文久三年三月二十五日条(『大日本維新史料稿本』所収)。

- (27) 『津山藩国元日記』文久三年五月七日条。

- (28) 同右、文久三年四月五日条。

- (29) 同右、文久三年五月二日条。

- (30) 同右、文久三年五月二三日条。

- (31) 親兵制度に関しては前掲(22)一九五～二〇〇頁。維新史料編纂会編『維新史』三(吉川弘文館、一九四二)三四八～五〇頁など参照。
なお「御守衛兵」と名称変更後も、諸藩においては「親兵」として通称されており、本稿においては「親兵」に統一した。

- (32) 『改訂肥後藩国事史料』三(細川家編纂所編、国書刊行会、一九七三)六六六～七頁。

- (33) 『国元日記』文久三年八月朔日条。

- (34) 『御上京中日記』文久三年七月十八日条。親兵制度化、組織化の過程がうかがえる好史料である。

- (35) 大方の藩では京都藩邸に滞留する藩士と親兵として滞京する藩兵の別がある。例えば熊本藩では親兵には藩内の中下級藩士の急進派が、藩邸には上級藩士の藩政主流派が存在した。津山藩については藩兵の絶対数の少なさも関わると思われる。

- (36) 『孝明天皇紀』四、四七三～八〇頁。

- (37) 『御上京中日記』文久三年八月十八日、同十九日条。津山藩親兵隊長

海老原の目から見た八・一八政変の事実がうかがえる新出史料。

- (38) 佐々木克『公武合体』をめぐる朝幕藩関係(『日本の近世』18近代国家への志向、中央公論社所収)一七七～八〇頁。

- (39) 『御上京中日記』文久三年九月九日条。

- (40) 同右、文久三年九月二十日条。諸侯「組合」については稿を分けて検討する。

- (41) 同右、文久三年九月六日、同九日条。

- (42) 同右、文久三年九月二三日条、『津山藩松平慶倫届書』(『大日本維新史料稿本』文久三年九月十九日条)

- (43) 三谷博『維新と「公議」』(『年報近代日本研究』一四、山川出版社、一九九二、後に同著『明治維新とナショナリズム』山川出版社、一九九七所収)四〇～一頁など。

- (44) 『孝明天皇紀』四、八一頁。

〔本稿執筆のための史料調査の折、津山郷土博物館の皆様にはたいへんお世話になった。記して謝意を表する。〕

(ささべ まさとし 文学研究科日本史学専攻博士後期課程)

一九九八年一〇月二四日受理

